

E・キューブラー・ロス著
『死ぬ瞬間』（読売新聞社）

この本との出会いは、今から三十二年前、就職したばかりの時、父が末期ガンで余命三ヶ月と宣告された時のことでした。

本を読みあさっていると、京都河原町の京都書院でその刺激的なタイトルが目飛び込んできました。当時は、アメリカではベストセラーでしたが、日本ではまだあまり知られた本ではありませんでした。内容は、死の宣告を受けた人と筆者が死についての話をし、その死に至る心理過程をまとめたものです。筆者は、その過程を五段階に分けていましたが、私見ですが、「十字架上のキリストの七つの言葉」と符合するものを感じました。余談ですが、私の好きなクラシック曲であるハイドンの「十字架上の七つの言葉」の当時のLPのジャケットのキリストの黄色に染まった体と、ガンが肝臓に転移し、黄疸が出ていた父がちょうど重なり、これも運命的なものを感じまし

読書案内

医学を目指す人はもちろん、身近な人の死に遭遇したとき、死を間近にした人と接するとき、是非読んでほしい一冊です。

東野圭吾著
『容疑者Xの献身』
(文藝春秋)

意表を突く展開の連続で、あつという間に読み終えてしまつた。『ありえない』でも、だからこそ安心して楽しめる一冊である。疲れた頭をスカッとさせたいときにどうぞ。

高校数学教師・石神が密かに想いを寄せる隣人の靖子。殺人事件を犯してしまった靖子を警察から守るために石神はアリバイ工作を行う。

『彼女は刑事の再三にわたる尋問を、的はずれとさえ感じていた』—ままと石神の仕掛けにはめられた警察は事件の核心に触れることすらできない。

『思いこみによる盲点をついているだけです』—読み返せば読み返すほどにその盲点をついた仕掛けは意外で非現実的、しかしそれでいて非常に論理的であることがわかる。

だが大学時代の同級生・湯川に真相を悟られた石神は最後の仕掛けに取りかかる。

『これほど深い愛情に、これまで出会ったことがなかった』—それほどの深い愛情に裏打ちされた石神の壮絶な献身、その真相を知った靖子は……

点をつけばいいのか。でも定期テストでこんな問題はつかり出したら平均点が……。3年の模試だったらいいかも！でもそんな問題作れるか？この本を読んだ後にこんなことを考えてしまふのは自分が数学の教師からでしょうか。

ツイアビ (演説者)

岡崎昭男訳

『パパラギ』(立風書房)

パパラギ……。不思議な響きの言葉です。実は南海サモアの現地語で「白人」を意味します。オーストラリアの遙か東の島々からなる国サモア。

本書『パパラギ』は、未開時代のサモア酋長ツイアビの演説集です。初めてヨーロッパを旅した彼は、西洋文明の危うさ、怖さ、まやかしをその深い洞察力で見抜き、故郷の仲間们に自分たちの持っている本当の幸について訴えかけています。

その一部を抜粋してみます。

「たとえば私が馬で村を駆け抜けるとする。たぶん早くは行けるだろう。だがもし、私がぶら

ぶら歩いて行くとすると、いろんなものも見物できるし、友だちも私に声をかけて、家の中へ呼んでくれるだろう。目的地に早く着くことが、たいした得になるわけではない。得とは、そんなものではない。パパラギはいつでも早く着くことだけを考えている。彼らの機械の大部分は、目的に早く着くことだけがねらいである。早く着けば、また新しい目的がパパラギを呼ぶ。こうしてパパラギは、一生、休みなしに駆け続ける。ぶらぶら歩き、さまよう楽しみを、私たちを迎えてくれる、しかも思いがけない目標に出会う喜びを、彼らはすっかり忘れてしまつた。」

ほかに、「たくさんものの物がパパラギを貧しくしている」とか「パパラギにはひまがない」という指摘があったり、「考え病」などという興味深い視点の内容もあり、原始的な未開の地の一酋長が、初めて文明を見たのにも関わらず、これほどまでに、本質的に西洋文明に迫っているのには驚きです。感性鋭い高校時代にどうぞ。

鶴我裕子著

『バイオリンリストは肩が凝るー鶴我裕子の N 響日記ー』(アルク出版企画)

鶴我さんは NHK 交響楽団(N 響)でバイオリンを弾いている。N 響は私が四十年前クラシック音楽に関心を持ち始めた時から、N 響アワー(昔の名称は忘れた)という番組を通じて親しんできたオーケストラである。私は学生時代、フルートを吹いていたから、特に吉田雅夫や小出信也など N 響フルーティストのファンでもあった。鶴我さんはその N 響で三十年以上、ただひたすらにバイオリンを演奏しているのだ。

この本は、鶴我さんが入団する前の東京芸大などでの修業時代のエピソードから始まる。芸大時代、先輩で指揮者のコバケン(小林研一郎)とケンカばかりしていた話などが語られる。次は N 響の舞台裏や指揮者の話、テレビでしか知らない審判や演奏会の実態などが詳しく述べられていて、とても面白い。

「奏者は指揮者よりもよく練習し、経験を積んで曲を知っていることがほとんどで、我々のさやかな願いは、「せめてジャマをしないで」ということにつぎるのだ」と、指揮者に対する批評も辛辣である。手塚治虫が彼女のバイオリンケースに鉄腕アトムを描いてくれた話も出てくる。彼女の好きな演奏家や CD も紹介される。この本を読んだから N 響アワーを一層楽しめるようになった。五月に梅田芸術劇場で行なわれた N 響演奏会で彼女は誇りげな表情をして熱演していた。この本を読んでも決して肩は凝らない。オーケストラ部員は勿論、音楽好きの人に一読を勧めたい本である。

奥田 英朗著

『イン・ザ・プール』

(文春文庫)

不思議な病気に悩める者たちが、今日も伊良部総合病院の地下にある精神科を訪れる。その扉の向こうで待ち構えているのは。

精神科医伊良部一郎の破天荒な暴走っぷりがとにかく笑えます。治療法がどうの、医者としてどうのと、問うてもなく、こんな人いるの?(いたら困るんですが)という疑問が湧くのも最初だけ。「慣れればどうってことない」ようです。欲望のままに行動する医師をみれば、「こいつは本当に医者なのか」と患者が思ってしまうのは無理

のない話でもなぜか憎めない。どういうわけか癒されていく患者、非現実的な人物設定・展開の数々に、テーマはシリアスなはずなのに、純粋に楽しめます。表題作「イン・ザ・プール」を含む五つの小編で構成されており、ちよつとした息抜きに最適です。「フレンズ」に登場するケタイ中毒の高校生に、少なからず気持ちがリンクしてしまいう方も多いのでは。高校生の皆さんは一日にメールを何通くらい打っているんでしょうか。作

品中の雄太君は二百回を超えるところから始まります。本作はシリーズ第一作。映画化もされているようです。文庫本になっているのはこれのみで

第二作『空中ブランコ』(直木賞受賞作です!)、第三作『町長選挙』は単行本のみ既刊です。

ダン・ブラウン著

『ダ・ヴィンチ・コード』

(角川書店 上・下)

ホセ・アントニオ・ウリヤテ・ファボ著

『反ダ・ヴィンチ・コード』

(早川書房)

丸橋賢著

『退化する若者たち』

(PHP 新書)

conspiracy theory という英語を知っていますか。陰謀説

今風にいう共同謀議のことです。

『ダ・ヴィンチ・コード』は世界中で 500 万部のベストセラー

となり、そしてあれよあれよという間の映画化。それに伴う

一連の騒動。そこに何らかの theory があると感じませんか?

現代世界を制覇している市場主

義の原理に見事に合致しています。本の中味は、それなりに楽し

めるものですが、書いてある内容は?。そのへんを冷静に吟

味してみるのも一興だと思います。

* * *

なお、最近出た『アンチ・ダ・ヴィンチ・コード』も合わせて紹介しておきます。この 2 冊を

合わせて読んだ後、まだ何か釈然としないものが残れば、それは西洋世界の基盤をなし、今なお世界を支配しようとするキリスト教というものを理解するほんの入り口に立ったのかもしれません。ともあれ、西洋世界に

* * *

対峙するには、キリスト教(と言っても到底一つに括することはできません)への少なからぬ

理解が必要です。

* * *

最後に、『退化する若者たち』について紹介してみたいと思

います。著者は、日本人の生物学的な「退化現象」は世界的に例

がないほど深刻な状況であると警鐘を鳴らしています。そして、

この本では、さまざまな観点からそうした退化現象をくい止めるための提案がなされています。

北野高校生も例外ではありません。是非、一読をしてみてください。